



本に学び、 努力を怠らない



今回は今年から下妻一高に赴任した新しい校長先生である渡邊剛先生に取材を申し込んだ。先生からの深い話が聞けたのでぜひ読んでほしい。

Q 先生の学生時代について教えてください。

A 自分はある物事を習得するのに他の人の倍の時間をかけていた生徒なのであまり優秀な生徒ではなかったです（笑）。ですから人に少しでも追いつくために人よりも多く努力していました。このことは今でも常に心がけていることです。得意教科は世界史・日本史でした。その理由は過去を学ぶことで、今をより深く理解することができるところです。これらの教科はとても好きだったので自ら進んで勉強していました。

Q 先生になった経緯を教えてください。

A 中学生のときに風邪をこじらせ、1週間学校を休んでいたときに吉川栄治の『三國志』、『新水滸伝』を読んだのがきっかけです。これらの本を読んだことで中国の歴史や文学、哲学に興味を持ちました。歴史からは偉人の生き様や歴史的背景を多く学べます。このこ

とから、高校の歴史が好きになりました。大学時代は中国文学を専攻していました。ここで諸子百家を学び、古代中国の歴史や文学、哲学について漢文を通して皆に知って欲しいと思い、国語の教員になりました。古代中国の事を深く掘り下げていくことは、実は日本のことを理解することにつながるのです。

Q 先生の趣味を教えてください。

A いろいろあります。本を読むことが好きです。高校時代は学校帰りに今は場所が変わっていますが、下妻市内の大塚本屋さんに立ち寄ってよく立ち読みをしていました。今でも本はたくさん読んでおり、いつもお風呂場で読んでいます。でも、カパーなどを特にしないので自分の持っている本はほぼグデグデ状態です（笑）。本には私たちの人生をより良いものへ導く力があります。一冊の本、数行のフレーズに励まされ、勇気づけられながら今を生きています。だから、本は手放せません。

Q 先生になつてよかったことは何ですか？

A 色んな人との出会いです。生徒はこれか

らの未来を担っている。その生徒の生きる支えになっていると思うと、とてもやりがいのある仕事だと思えます。ですから、先生という職業はとてもお勧めです。

Q どういう授業を心懸けていましたか？

A 楽しい授業を心懸けていました。生徒ができる、分かったことが分かる、そういう楽しさが自分の楽しみに繋がっていました。難しいことを分かりやすくというスタンスでした。

Q 下高生にむけてのメッセージをお願いします。

A 失敗を恐れずに挑戦することです。失敗というのは現時点での自分の課題です。失敗を糧とし、挑戦し続けることでいずれは失敗ではなくなるのです。ですから、人生に失敗はないのです！また、挑戦することは若い人たちの特権です。自分を決して低く見ず、挑戦しつづけてください。生徒の皆さんは何にだってなれるのですから！

校長先生、取材のご協力ありがとうございます。

（矢吹）

生物部を突撃！！

本格的な研究に驚嘆！

←生物部の皆さん☆



皆さんは下妻一高の生物部について詳しく知っているだろうか。今回、新聞部は生物部の高田波音さん（2年5組、以下高田さん）、鈴木優花さん（2年4組、以下鈴木さん）に取材した。

―活動内容を教えてください。

部員それぞれが興味を持った分野について研究しています。

―今やっている研究は何ですか？

（鈴木さん） 私達のグループは、シジミの浄化作用について研究しています。シジミを汚れた水に入れて、赤、青、緑の三色の光を当てます。それぞれ

の色によって生まれる浄化速度の違いの有無を調べています。

（高田さん） 私は、ヤブカラシという植物について研究しています。ヤブカラシが同種を識別し、同種同士の生存競争を防ぐため同種に含まれるシユウ酸を検知し忌避するのではないかとという仮説を立て、研究を行っています。

―今後やりたいことは何ですか？

（高田さん） 今後は、筑波山での植物観察を予定しています。―下高生に向けて一言お願いします。

（高田さん） 日本は四季がはっきりしているので、色鮮やかな植物たちを見ることができ。見て美しいのはもちろん、生存戦略などの素晴らしい魅力が

あります。また、生物部では、新入部員を募集しています。生物部は、月・水・金の週3日、基本は午後6時まで活動していますが、バスや電車の時間に合わせて帰宅できます。両立をすることができ。生物の成績も上がるかもしれませんね（笑）。また、兼部をすることもでき、実際に兼部をしている部員もいます。興味を持った方がいたら、ぜひ入部してください！

今回生物部を取材してみても分かったことは、部員それぞれが熱意を持って研究に取り組んでいるということだ。今後も生物部の活躍から目が離せない。

（大出）

論 説

みなさんはかの有名な「ピーター・パン」という物語を知っているだろうか。私たちは子供時代に多くの希望と共に「空を飛びたいなあ」と思い映画を観ていたことであろう。ダーリング一家の長女ウェンディは素直な心の持ち主で、おとぎ話であるピーター・パンを信じており、弟たちもこの話に夢中であつ

た。父親はそんな子どもたちを見兼ねていた。ある夜、ウェンディの両親がパーティーに出かけた後にちようど自分の影を取り戻しにやってくるというピーター・パン。そこで、憧れのピーター・パンと出会ったウェンディは、妖精の粉をかけられて、弟2人と一緒にネバーランドへ行った。

しかし、ここで現実的に考えてみてほしい。実はこの物語、ダーリング家とピーター・パン（以下よりP氏とする）による犯罪行為の記録ともとれる。物語の初頭はダーリング家の影略奪遂行後よりスタートする。それを取り返

彼は一体何だったのか

昨今の世の中は多様化し、複雑化しているため、表面上（下）で

は物事を十分に語ることとはできない。幼少期、希望、夢、愛、理想などの情熱を重ね見つめていたピーター・パンは、今、思い返してみると、必ずしも正義のヒーローとは言えないだろう。私たちはこの世界で少なからず偏見を抱えながら生きている。それを理解した上で自分を見つめ他者との共存していくべきである。我々はピーター・パンであるとともにP氏でもあるのだ。

（倉持・茂田・館野）